

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 15 日現在

機関番号：37503

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25283016

研究課題名(和文)カンボジア仏教の歴史・人類学的研究：国民・民族文化創生のダイナミズム

研究課題名(英文)Historical and Anthropological Studies on Cambodian Buddhism: Dynamism of Creating National and Ethnic Cultures

研究代表者

笹川 秀夫 (SASAGAWA, Hideo)

立命館アジア太平洋大学・アジア太平洋学部・教授

研究者番号：10435175

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、歴史学と人類学の手法を統合し、植民地期から現代にいたるまでのカンボジア仏教を包括的に理解することを試みた。まず、現代の寺院に関する情報をデジタル化し、歴史データと組み合わせ、人口密度と寺院の立地との関係、教育政策の浸透過程などを論じた。また、特定の郡において、僧侶の移動や出家のパターンに関する悉皆調査を実施し、個人のライフコースと出家の関係を検討した。そのほか、言語政策への僧侶の関与、寺院における食を中心とした在家者の役割、寺院における各種建造物の変遷などについて個別の論文を発表し、カンボジア仏教を多角的に解明することを目指した。

研究成果の概要(英文)：Integrating methods of historical study and cultural anthropology, this research project aimed to elucidate Cambodian Buddhism from the colonial era to the present comprehensively. In the first place, information about contemporary temples was digitized and combined with historical data in order to discuss the relationship between population density and temple locations and the process of defusing educational policies. Next, field research on mobility of monks and ordination patterns was conducted at particular districts to analyze the relation between life course and ordination. In addition, several articles on monks' involvement in language policies, lay people's roles in terms of food preparation at temples, the historical transition of various buildings there, etc. were published for the purpose of shedding light on Cambodian Buddhism from multiple angles.

研究分野：地域研究

キーワード：カンボジア 上座仏教 地域研究 歴史学 文化人類学

1. 研究開始当初の背景

カンボジアは 20 年以上にわたる内戦とポル・ポト政権による圧政を経験したものの、1990 年代初頭に和平が成立した。その後、90 年代後半からはフィールド調査が可能な地域が拡大し、文献資料の公開も進んだ。研究環境の改善を背景として、さまざまな分野で研究が進展してきた。

なかでも仏教は、カンボジア社会を理解する鍵として注目度が高い。本研究の開始当初でも、英語圏で研究の進展が見られ、いくつかの著作が発表されていた。ただし、多くの研究が個別のテーマを扱うにとどまり、カンボジア仏教を包括的、総合的に把握する成果が俟たれる状況にあった。

日本では、本研究課題の代表者および分担者による業績が、本研究の開始以前に発表された主要な研究であった。また、代表者および分担者の計 3 名は、これまでに複数の共同研究プロジェクトに参加、あるいはプロジェクトを組織し、研究成果の共有や方法論の融合を模索してきた。本研究を通じて、これまでに得られた知見やデータを統合し、新たな調査で得られたデータを加えることで、植民地期から現在にいたるまでのカンボジア仏教の全体像を提示することが望まれる状況が看取された。

2. 研究の目的

19 世紀半ばから 20 世紀初頭にかけて、カンボジア仏教はタイ仏教の強い影響下にあった。1854 年、タイ仏教のタンマユット派が伝播し、トアンマユット派としてカンボジアに根をおろしたことが、在来派がシャム (1939 年に国号をタイへと変更) と同様にマハーニカーイ (内戦後の発音ではマハーニカーイ) と名づけられたこと、宗派を問わず僧侶がパーリ語の学習や経典の請来を目的にシャムに留学していたことなどが、タイ仏教の影響としてあげられる。

1910 年代から本格化する植民地政庁の対

仏教政策は、こうしたタイ仏教との紐帯を切断することに腐心し、他方で同じフランス領インドシナに属すメコン・デルタのクメール人仏教徒にカンボジアと同様の政策を適用した。プノンベンを中心とするパーリ語教育やクメール語訳を付した経典の編纂は、独立後にカンボジア仏教が国民文化となる礎を築いた。

しかし、国民文化としてのカンボジア仏教が成立する過程については、必ずしも明らかになっていない点が多い。そこで、中央の政策がどのように地方に普及したのか、僧侶に対する教育内容はどのような変遷を遂げたのか、マハーニカーイ派にはチュオン・ナート師、フオト・タート師という著名な学僧が出現した一方で、トアンマユット派がカンボジアの国民文化となるに際して、重要な役割を果たしたのは誰かなどを、本研究で明らかにすべきテーマとして掲げた。

その後、1975～1979 年のポル・ポト政権下、カンボジア仏教は深刻な断絶を経験した。断絶後、1979 年からのマハーニカーイ派の復興過程については、カンボジア独自の復興運動が私度とされ、メコン・デルタから授戒師を招いた政府公認の得度式こそが復興の起点と見なされるようになった点など、本研究の開始時点である程度まで解明が進んでいた。ただし、植民地期以降の仏教政策がメコン・デルタのクメール人僧侶に与えた影響、ベトナムとカンボジアが別個の国民国家として切り離された影響、現在のベトナム＝カンボジア間、タイ＝カンボジアのヒト、モノ (経典)、カネの動きなど、解明すべき点が多い状況にあった。一方、トアンマユット派に関しては、現在も宗派の長であるブオ・クリー師が 1991 年にフランスから帰国して復興したことが知られているものの、復興過程の詳細については、ほとんど研究が進められていなかった。

また、復興を遂げたカンボジアは、僧侶を

含めた国民の移動に対する管理を強める一方で、僧侶や俗人女性修行者によるカンボジア国内外での移動は続いている。こうした移動のパターンを明らかにすることも、現代カンボジア仏教の理解に不可欠と判断された。

以上のとおり、カンボジア仏教に関しては、史的変遷を把握するためにも、現代における展開を知るためにも、検討すべき点が多い状況が見られた。そこで本研究は、これら複数のテーマに取り組み、カンボジア仏教を包括的に理解することを目指した。

3. 研究の方法

本研究課題は、以下の4点をテーマとし、カンボジア仏教の包括的な理解を目指した。調査地域はカンボジアを中心とし、必要に応じて隣国タイでも調査を実施した。

(1) カンボジアの寺院に関する歴史・地理データの整備（笹川が主に担当）

代表者と分担者の計3名は、平成20～22年度に科研費基盤研究(A)「大陸部東南アジア仏教徒社会の時空間マッピング：寺院類型・社会移動・ネットワーク」(研究代表者、林行夫京都大学教授)に分担者として参加し、カンボジアの寺院に関するデータを網羅的に収集する機会をすでに得ていた。そのうち、宗教省から入手した寺院のリストを、国勢調査の結果と照合するなどして、デジタル地図として表示することに成功していた。本研究の開始後は、笹川が入手した官報からのデータ約6,000件と寺院リストを照合し、地理情報システム(GIS)を用いて寺院に関する歴史・地理データの分析を進めた。

(2) 僧侶の移動に関する悉皆調査のデータ分析（高橋と小林が主に担当）

分担者である高橋と小林は、上記の科研費「大陸部東南アジア仏教徒社会の時空間マッピング：寺院類型・社会移動・ネットワーク」の共同研究のなかで、それぞれコンダ

ル州内の1郡、コンポントム州内の4郡にて、全寺院、全僧侶の悉皆調査を実施して、僧侶が過去5年間、どの寺院に止住していたかを示すデータを入手していた。本研究開始後は、データの分析を進め、上記のデジタル・データと統合して、僧侶の移動パターンに見られる傾向や特徴を把握することを試みた。

(3) 寺院における教育の分析（笹川と小林が主に担当）

カンボジアの寺院は歴史的に見て、僧侶に対する教育と、世俗の学童に対する教育を担ってきた。僧侶に対しては、1920年代初頭に地方のパーリ語学校～ブノンベンの高等パーリ語学校という制度が確立した。1953年の独立直後には、この制度が仏教教育学校～スラムリット仏教高等学校～シハヌック仏教大学という制度に改革された。こうした制度の変遷は、本研究開始以前から笹川が論文(2009)で明らかにしている。

一方、世俗の学童への教育は、寺院に併設された寺子屋が、1920年代半ばから公的な教育機関と認められ、「改革寺院学校」と呼ばれるようになった。その教育内容については、笹川が2006年に刊行した書籍『アンコールの近代：植民地カンボジアにおける文化と政治』(中央公論新社)で分析済みである。ただし、制度の変遷については、フランス人研究者パスカル・ブザンソンの著作に依るところが多かった。しかし、ブザンソンはカンボジアでの調査を実施しておらず、近年の調査で新たなデータが発見されつつある。笹川がデータを収集してきたカンボジアの官報には、改革寺院学校に関する情報が数多く見られるのに加え、国立公文書館には改革寺院学校への視学官派遣に関する文書資料なども多数収蔵されている。これらのデータのうち、小林が調査地としたコンポントム州を優先的に取り上げ、寺院名を現代の寺院と同定する作業や、植民地期の僧侶数、寺院学校で学

んでいた学童の人数などを把握し、寺院の規模や教育政策の浸透度合いの歴史の変遷を理解することを試みた。

(4) カンボジア仏教界の俗人女性修行者（高橋が主に担当）

カンボジアでは俗人修行者の集団的な「留学」は未だ見られないが、1990年代にタイへ越境し、経典学習（特に論蔵）を修めて帰国後、一般仏教徒や僧侶を指導する俗人女性修行者や、国際 NGO による国外での研修経験があり、社会貢献を目指す女性修行者のグループの存在が本研究の開始時に注目された。そこで、カンボジア仏教界における俗人修行者のこうした新しい動きが、僧侶を含む仏教界にどのような影響を与えつつあるかを、カンボジア・タイでの現地調査によって明らかにすることを試みた。

4. 研究成果

本研究で進めた調査・検討のうち、歴史・地理データのデジタル化と地理情報システム（GIS）を用いた分析については、人口密度と寺院の立地との関係や、植民地期以降の教育政策の浸透と現存する寺院および学校の位置関係などを析出することに成功した。また、僧侶の移動に関する調査からは、国外も含めた多様な移動のパターンが見出されたことに加え、個々人のライフコースと出家パターンを析出することができた。

これらの分析結果をもとに、2016年9月、カンボジア、プノンペンに所在する王立芸術大学にて、本研究の代表者および分担者の計3名が分担者を務めている科研費基盤研究(A)「宗教＝社会複合マッピング からよむ大陸部東南アジア仏教徒社会の動態と変容」（研究代表者、林行夫京都大学教授）と共同で、成果発表のためのワークショップを開催した。さらに、このワークショップの発表内容をもとに、英文による論文集を刊行した。

今後は、日本語でも口頭発表および論文集

の刊行を進める予定にしており、日本国内にも研究成果を還元したい。具体的には、2018年6月に開催予定の東南アジア学会第99回研究大会でパネルを組織し、歴史・地理データと個人の移動・出家データをさらに統合して、本研究課題の代表者および分担者が個人もしくは共同で発表を実施する計画を立てている。日本語による論文集は、上記の科研費基盤研究(A)「宗教＝社会複合マッピング からよむ大陸部東南アジア仏教徒社会の動態と変容」によるカンボジア以外の研究成果ともあわせて、仏教関係の専門書を扱う出版社からの書籍刊行を予定しており、カンボジア、さらには東南アジア以外の仏教を専門とする研究者にも、本研究による成果を伝えていきたい。

こうした共同研究による成果のほか、本研究4年間を通じて、代表者および分担者の計3名は、個別に口頭発表と論文執筆を進め、カンボジア仏教を多角的に論じることを試みてきた。代表者である笹川は、僧侶が植民地期および独立後のカンボジアにおいて、言語政策にどのように関与し、国語の成立にどのように関係したかを論じた日本語および英語の論文を刊行済みである。分担者である高橋は、寺院における食という観点から、俗人の修行者や在家者を含めた寺院の機能を多面的に検討した論文を刊行している。また、俗人修行者によるタイへの「留学」や、帰国後に経典指導を行う様態など、隣国との関係についても論考を準備している。同じく分担者である小林は、フィールド調査を重ねるなか、寺院における多様な建造物に注目し、寺院建造物の変遷に関する論文を発表済みである。

本研究が当初に掲げたテーマのうち、隣国との関係などについては継続調査が必要なものもあるが、当初の計画以外にも成果を論文などで刊行できたテーマもあった。論文には査読付きの英語論文が複数含まれており、

カンボジア仏教を包括的に理解し、調査地であるカンボジアへの成果還元を含めて成果を広く公開するという本研究の目標は、一定程度まで達成できたものとする。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計13件)

(1) 笹川秀夫「カンボジア上座仏教」パーリ学仏教文化学会上座仏教事典編集委員会編『上座仏教事典』めこん, 2016年, 156-157頁(査読なし)

(2) 笹川秀夫「カンボジア仏教の宗派・サンガ組織」パーリ学仏教文化学会上座仏教事典編集委員会編『上座仏教事典』めこん, 2016年, 158-159頁(査読なし)

(3) TAKAHASHI Miwa, “Food Supply in Cambodian Buddhist Temples: Focusing on the Roles and Practices of Lay Female Ascetics,” *Southeast Asian Studies* 4(2), 2015, pp. 233-258(査読あり)

https://www.jstage.jst.go.jp/article/seas/4/2/4_KJ00009896419/_article

(4) SASAGAWA Hideo, “The Establishment of the National Language in Twentieth-Century Cambodia: Debates on Orthography and Coinage,” *Southeast Asian Studies* 4(1), 2015, pp.43-72(査読あり)

https://www.jstage.jst.go.jp/article/seas/4/1/4_KJ00009707739/_article

(5) 小林知「森にセイマーを見いだす：浄域を通してみるカンボジア仏教再生の動態」藤本透子編『現代アジアの宗教：社会主義を経た地域を読む』春風社, 2015年, 419-469頁(査読なし)

(6) 小林知「ブッタと精霊：カンボジア仏教徒による積徳行の原風景を考える」長谷川清・林行夫編『積徳行と社会文化動態に関する地域間比較研究：東アジア・大陸東南アジア地域を対象として』(CIAS Discussion Paper

No.46) 京都大学地域研究統合情報センター, 2015, 35-41頁(査読なし)

<https://www.cias.kyoto-u.ac.jp/files/pdf/publish/ciasdp46.pdf>

(7) SASAGAWA Hideo, “Appraising the Research Value of the Cambodian Official Gazettes,” *CSEAS Newsletter*, No.70, 2014, pp.20-21(査読なし)

<http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp/wp-content/uploads/2014/12/newsletter70.pdf>

(8) 小林知, 高橋美和「カンボジア仏教の時間分析(2)：出家者の経歴の検討」林行夫ほか編『宗教実践を可視化する：大陸部東南アジア上座仏教徒の寺院と移動』(CIAS Discussion Paper No. 42) 京都大学地域研究統合情報センター, 2014年, 69-77頁(査読なし)

<https://www.cias.kyoto-u.ac.jp/files/pdf/publish/ciasdp42.pdf>

(9) 高橋美和, 小林知「カンボジア寺院質問紙調査から見える俗人寺院止住者の実態：コンダール州とコンボントム州との比較」林行夫ほか編『宗教実践を可視化する：大陸部東南アジア上座仏教徒の寺院と移動』(CIAS Discussion Paper No. 42) 京都大学地域研究統合情報センター, 2014年, 79-82頁(査読なし)

<https://www.cias.kyoto-u.ac.jp/files/pdf/publish/ciasdp42.pdf>

(10) 笹川秀夫「カンボジア上座仏教寺院に関する歴史データ」林行夫ほか編『宗教実践を可視化する：大陸部東南アジア上座仏教徒の寺院と移動』(CIAS Discussion Paper No. 42) 京都大学地域研究統合情報センター, 2014年, 83-91頁(査読なし)

<https://www.cias.kyoto-u.ac.jp/files/pdf/publish/ciasdp42.pdf>

(11) 高橋美和「教壇に立つ俗人女性修行者：カンボジア仏教界における女性の進出動向」『東京外大東南アジア学』19, 2014年, 128-146頁(査読あり)

(12) 笹川秀夫「カンボジア上座仏教寺院の史

的変遷(1): 官報からの歴史データの分析に向けて」『宗教と地域の時空間マッピングニューズレター』6, 2013年, 1-13頁(査読なし)

(13) 小林知「カンボジア農村における仏教施設の種類と形成過程」『東南アジア研究』51(1), 2013年, 34-69頁(査読あり)

<https://kyoto-seas.org/wp-content/uploads/2013/10/510102.pdf>

〔学会発表〕(計5件)

(1) SASAGAWA Hideo, “Historical and Geographical Data on the Buddhist Temples in Cambodia,” International Workshop “Mapping Buddhist Cultures among Theravadin in Time and Space,” September 23, 2016, Royal University of Fine Arts (Phnom Penh, Cambodia).

(2) TAKAHASHI Miwa and KOBAYASHI Satoru, “A Comparative Study of Temple Residents in Kampong Thum and Kandal Province, Cambodia: Their Attributes and Mobility,” International Workshop “Mapping Buddhist Cultures among Theravadin in Time and Space,” September 23, 2016, Royal University of Fine Arts (Phnom Penh, Cambodia).

(3) 高橋美和「カンボジアにおけるエイジング・家族・ジェンダー：仏教寺院止住者調査より」第43回日本生活学会研究発表大会, 2016年5月22日, 立教大学新座キャンパス(埼玉県)

(4) 小林知「カンボジア農村における宗教的リーダーシップの変容：アチャー・ヴォアットの経歴分析を中心に」第9回日本カンボジア研究会, 2015年6月20日, 早稲田大学戸山キャンパス(東京都)

(5) 高橋美和「食から見るカンボジア仏教寺院：食の供給・持続と信仰・実践」女子栄養大学栄養科学研究所第7回食文化経済学研究会, 2013年7月12日, 女子栄養大学坂戸キャンパス(埼玉県)

〔図書〕(計1件)

(1) KOBAYASHI Satoru, HAYASHI Yukio, SASAGAWA Hideo, TAKAHASHI Miwa, eds. 2017. *Mapping Buddhist Cultures among Theravadin in Time and Space*. Kyoto and Phnom Penh: Center for Integrated Area Studies, Kyoto University, 240p.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

笹川 秀夫 (SASAGAWA, Hideo)
立命館アジア太平洋大学・アジア太平洋学部・教授
研究者番号：10435175

(2) 研究分担者

小林 知 (KOBAYASHI, Satoru)
京都大学・東南アジア研究所・准教授
研究者番号：20452287

高橋 美和 (TAKAHASHI, Miwa)
愛国学園大学・人間文化学部・教授
研究者番号：40306478